外夷巡意記 初編 五

吉田屋

庫 105 80 5 169
番號 148
冊數 40
へ13 3093 5

吉田屋

朝夷巡嶋記 全傳 巻之五

東都 曲亭主人編輯

初輯第九

朝霭乃庄司暖
夕立 社 許我郷

阿三郎ホゞ住ひゐる。大瀦の浅江より。船堀圖内ゞ宿所まゞ。十八九町ゞ程ゝ
ちゝく中間ゝ庄司暖あゝ。大瀦ハ和名鈔。國郡の部ゝ見えて。朝夷郡ゝあり。
今ハ定うゝふゐゐや地名ホ今昔の差別あゝ。道路も又ちゝたゞ為べ〜今ゝ
推さゝゐゐハ舷ゝ刻る類といゝまゝ。ゐゐく兎阿三郎ハ
ゝろせゝ〜ハ今ハゝも後世ゝ千日菴へ勢ゝてまゞ施仏を繋べ死欲眼代ゞ
いゐゐく船堀ホを繋べ死欲と且ゝ門傍ゝ立在ゝ又つゝと思ハ也
起ゝゝハ池仏ゝゐゝ又の枉死ハ船堀ゞ殘酷の筆楚ハ

昭和九年七月二三日 購求

門 へ 13 3093 巻 5

敲ぬる圖内を経て後ふハ元弥仏ハ慈成須んとしぬるまゝ。と杜裏ふ尋思
瞻仰ふ只若葉の山梢たちなのぼりてさし升る廿日餘中の月の暈さしくぱくへハ乗
道おちぬれ鳴く杜鵑冥土と婆婆の二親をうけてぞ憑む神仏の冥助利益を
祈念して歩の運び紙いそがせバ庄司墾成たゞ過て讐の宅地ふ近つえバ築垣ふ
身を倚て内の安ふ成窺ふよ門率ハ寝ぞやあさけん窗の隙よりまで火光漏て折く
うち語ふる是さへ憎しと潜入る隙を求めて背へ遶りて竊ぬバ後堂ナ此と
みゆべし筑紫琴のよる亟幽ふして哥ふ人の笑ふ声きこえて時なる早ま
けりしかふさらバ怪しめりたちん且く退えて更ふ成やくえんと浅江のかくえ五
六町立ち除前面よ里人とおぼしきもの両三人ほどは立てうち相譚ひ来ふけれバ。
ここに成総よ居ものゝやと思へど只一條なる径よりなれバ避ふよし。
忙くえくぬれバ道次よいと畑ありて庵扉なくなるまで居さえみちなる堂ありけり。

且く去ふみと思ひし紙ありて路交く人成遣るときふ彼ホハ浅江のこなくころ居深澤乃莊
容ちあよこの日聊代の夫役よとらぶれて夜を十ふおかで還るとおぼいて人跡ハ漸くふ
絶て。あのみ役り紙もきぞも時をやけまぜ籠りをなく。さして居る月影よ奥成さくる紙
よく見まべ本尊ハ石の不動なり。そのとえ阿三郎思ふやう。ここも年来日本よ至。
この明王の仏ふ成ハ我遍となく過ぎしまぞも有盤ふおひ企て念ぜよし。とハ
あるぞしふ苦しきとききの神詣と世話ふいくるハ故あるさる今宵ハよくふ立志のひ。
仇人を狙撃んとてつやく思ひくはざえ不動ハ釈迦あるよ大日なりもの日ハ陽德の
母ふしく萬物をよふよつえく成就を降魔の利劔縛の索像見の刃も倶利迦羅え
給とのひ恰とのひこの明王の擁護よよるハ仇を撃とせさるとまあん式への御
像ハ日本武尊え右の手ふ持ふせるふ刃ハ草薙の剣え左の手ふ握ふせぬものハ列の木
この尊東征して駿河國ふまぐ来ませ世しとえ暴悪どもれ将ハ假托待やりて誘引ありり。

叢に火を放て火攻んとしけるが尊ハ腰なる燧ぶくろ出してむかひ火を焼つけて十束の御剣を引抜て草を薙たまひしかバその火ハ仇のかたに移りて東夷どもみな焼殺さる因て件の宝剣を草薙と名つけたまへり。二ツとなき御姿をまのあたり摸し奉り。上総国に祭たまふ摘燧の神にむくハく。この神祠を建てしに神體不動に似させたまひき。彼本地なる大日と日本武の日と相かよふが本地垂跡の義をとりて今ハ不動と唱るとのへられ満禄寺にありしと老師の夜話に聞えたり。日本武ハ弓箭の祖なれバ亦武門の守護神にて神仏その義ハ異なりとも何にまれ今なほ宜い助の外胄をぬぐしなひて輙く仇を殺せたまへと丹精を抽て祈念に時をうつしゝそ遠寺の鐘声幽に聞えてはや子の時になりしが今ハよし此頃べしとて外面へうち出まく。いつの程にか天結陰て月の鏡もつゝまれしかバよく便宜をゑたりけり。かくて又熊堀が門前へ由来てつ閉に更て見るに琴の音ハそぞやかなりとて聞えて笑語の声も絶る

時うつしての俟みしく夜を明さバ再び志のひよること難しといそぎせ陰とおもひかへさりけれ頓に早まるとも今さらに術なしよしバ暗き処に身を屈して仇の睡熟を俟てあらバ浩処に世渡りハ夜とて更に由断せず長檀を一荷にして燈火さえに担擔し声よく冴る商人が蕎麦をめさぬかとよばゝや間酒も吼と鳴りけつ眼代が宅地の辺を過るにちやん門番ハ窓の戸を細やかに引開てこやくと呼ながら当番ちう鼓だにもとよ。あまり過ぎてまおのが呼声もきけバ聞えずや。燈火も烏夜の光見ゆべからず。このをとこハ焦燥て彼耳ちかし奴が今宵も沽る酒垣をやありけん枢戸を早く遠く推開て身を横ざまに閉こ出てながら一町ばかり追蒐たり。阿三郎ハこの光景にそれとしも隙陀の宜い助なとおもひて祝して。件の奴隷を遣りすごして潜ひ入るに前面に所なるべし。障子の内に鮮明の燈火の光をえ左右のかたハ庖湢とおぼしくて。折繞らし

とぼそ板屋あるとべつの奥へ遠くまけりさらとく足袋脱く右の足袋進めて果せうとの
柴垣あると折戸あるとこの外庭門ありて酒のあとを拭び無きざる声際ちろく鳴るとべ新ろを
推とふ さとそちら行く庭あり池あり樹立深し書院とあるべ見る簾下の橋 声さろ
かく人淡びよりとべ使室あるとべ両戸西三枚開くるのちに障子あるべ障子の外に部屋主殺
まるふ八九人いつく醉こる声ざるあるく夜へたるや更こり婢ども盃盤をとり納めよ
舟を漕ぐあの童ふ起とく琴を踏折るるといつへあるべ圖内へ阿三郎へ縁頼ちろ
羅漢松の間とりふ隠まそ内のゆろ狀窺へべ婢們へ許さまこく寝ふ酒ろるとちべし
かるふ圖内へ餘多尽くどやあるとん五六人囲坐しとうち彈ふ琴ふ笑けべ國内が
冢子鑑堀小頓太そう丈鑑堀小珍二十日菴の女僧祝仏私事ろ平決めふ主殺
とべく六人ちるとべ當下國内へ匍匐しく扇拍子をとるとうち朗詠試掘ふ也べ祝
呼べとうち笑ひ祝仏へ何とうちへ淡江の豊六を結果く汝ろ殺と狙しこ計第へ

妙ろ殺ろ繼ろ威勢ろく憎しろへ奴ろりとも罪ろそへ殺さまべ者と甘く
作計て盜賊へ者さまべて蟬ろ汝ろるまでるころ私の沙汰とせるべさまべ
今宵の吉酒ろべ子小頓太ろ誕辰を兼さ汝を壽ろつかべろと楽ろのち
るし秋しく思ろどやとのべ祝仏うちわく笑こ寝ろ刀祢の西庇ふ因て者ろを
て割く口強ろる仇と報ひ恥ち雪めし祝びへ者の秘ふ迷ちるとも唱しこ喃切
平他ろへ思ひ者ろと少他ろへ思ひそとのひへくこべ子をこへ人まべそへ宣ふ
までもいろと年末母を安楽ろ養まべ者りて某さへ威徳つろく莊客們ふも武
さげろころへ大刀祢の御恩ろり加 誅新 者の決攻をとこへ某べべ者ろ怒ふ
あるとしと祝竹馬の友ぐゆへべちろ比刀祢ろ清ちろしく己ち武御内へ者りし世
者公のふあの世ふ彼使者をちろ者ふ者ろ連愛さまをとと哉とのれしく決
攻ろ白ふ新者ふあへるまとも切平ふ攻ろ者ふまべとく出ところ世べとなく

絵いまいまく莊客們が面を識るものの孫。この密計ゑ行せん。箇樣ここに成せよ
うーと示させのふよいろゑ成るく。平群薩平と名告へ。豊六が宿所へ赴死とゆう
かう申う就ーとうと叶ひ是ーるのぐうよく者ーう。と鼻鳴呼めうせび純仏ゆゆのあへど
嘆息ー者ーうとのへども今夜ゆ。さうろゆかくうへ豊六が妻とその子へ惹なくく。
聞ちうゑ浅江村よあるとゆ称むう者ふせのうどや彼豊六が一子へその後ゑ阿三
とう嘆くへ年ゑ月十六七ゑとも。身長へ六尺ぞうと筋骨の逞しげなる。
相撲とりとゆいひべゑ大童ゆなんなる巳這奴り尼といく怒ーく葬を
開ーとのあべ月ゑとうゆへ御ぞぐーー。とうくび後ゆとうびさとて葬へ還ら
ぞゆいつ這ーうさうゑ待ふん。よく計せのひねといふ小頭太小珍二へ小勝成
敷ーうち笑ひ純仏が唧かまーく。頑童ゑとゑ成おそーとうへとまーうのゆを
ごが大人が豫よゑと惠ーまく。竊ゑ人ゑ成違ーく。彼大童と向せゆふゆ這奴へ武義の

かくへいゆゑて五六日ゆゑうとのりかへーとまび竊ゆ告よと村長ゆ命ーゆへ捕
ゆ遠ーうゑ親ゆゑとーゑ盗賊の科成員ーく獄舎ゆ繋ぎび捺り殺さうゆいと易ーう
と暴ふまーく頭成麿原来根成尚ゑ成枯ゑ後の患成除んとうゆを計せゆ人ゆ
ゆゑ。ゆくまで御庇を蒙ーと。襁褓の中よゑ和子達ゑ乳をあゆふ世餘波ゆふへ。
さうよゆゑ尼ゆ幸へとゆひく笑へ顔の皺。えーとうよゆ成推延ー圓ーゆ目を細く
者ーく。ゆ成ーとうゆゆ成ーゆ畏の乳母優婆夷ーとても昔の餘波ゆり所
三郎へさうゑ尼ゆ図内ゆ姦計一五一十を告へく猶ーゑ或へ怒りつ殺ぶつ吐裏ゆ
ゆう。図内成報ーとゆ純仏ゑ漏さう送恨ゆゆべゑ今宵の圓居へ尼のこなゆうびく
彼切平へゆ父ゑ責殺ーゆる癖者なゑゑ又決ゆとゆるく奴へゆゆ母成統計こ
銭を贈ゑ薩平へ加ゆる図内ゆ子ども。小頓太小珍二へまーさび漏さびゆゆ六人を
殺ゑ弾さゆ養親の亡魂を慰ゆゆ足りぬべ長ゆん田ゑ夜ゑ祈ーこ陸明王不動の

宜も助るなりと見て嘸て塵浄めして。縄をとりて還俗し刀の鞘を湿らしとす。
志ふな佛の名を汚さ純仏はとて。この比の夜の短さに丑三ツ過つるに。
枕は假寝なるべきに欲臥房へ入らせたりといふに國内は起る皆りなる故に愉
酔ゆゑ子どもらとなほさく寝よみて休めと腰挿の刀を取て立ちあがる。
前面の障子を蹴ひらきて跳入る阿三郎は主従齊一驚として先は狼藉なる。
何者ぞ不覚に命を捨に来つる半熟の偸児なるかといはせも果ず信と疾視好
賊どもの立るさる死を酷吏は虎より暴しと云古人の言に誠に故ある罪なら
志て獄舎に繋れ非法の呵責に命を隕せし豊六が甲なる子阿三郎を識ざるか。
人を指て賊といふ汝等こそ民を掠め仏を賣て施物を促き円頂衣冠の偸児なるを
己ま五七日旅寝して立入ぬ舊里の親の枉死は女僧純仏と眼代國内が毒
悪の謀にありとしれども雲晏時も怨ずまさいかで死を報んとて潜び入りぬ

彼処にも汝等が同じかり。伎倆はさまでも其果は彼も此も暁さんや國のためには好を
鋤き親のためには讐を撃ツ刃を受よと罵りて國内は子共と切平ホに同じく注して冷
笑ひ土百姓の子の分際で威徳領主に敵して死は吾儕を仇として寃ふは蟷螂が斧
のごとく車にむかふが如し。鳴呼ゝ白物よ腮さらせよと土と云ふまで後か
切平決死組まとよる鉄引つけて両手に衿上摧てて一反あまり投退て件の二
人は礫のごとく打延され。雲晏時は起もあらざりけり。籠堀親子は二刀勇力に其をば捩て進む
るを頼みに入れ候もんとて阿三郎は憤怒して倶利迦羅の刀引抜て國内を目がけ
飛かゝる勢ひ当りかたく有繋に親を捨せじとて小頬太小弥二遽しく
琵琶琴を肩にしてやり当めてあるとも小刀を晃して抜あはせ両三合戦ふ
程に國内は子共を撃せじと刀をうち揮力を戮しく鋼を削る奮闘に空へ鳴
三郎は三方に敵を受て物ともせず秀ろ作が傳へたる鞍馬八流の秘術を尽して電光

石火と閃き刀尖を挂る拾ふ所藤堀親子ハ小髪肩先浅痍四五ヶ処負ぬ母子ハ
受太刀ふるひ〳〵ば迷ひ迷ひ逃る純仏も脱さくもひん阿三郎ハ後方ふり返
庭ふ歴と組著く弯倒さんと云ふ母ハ野ふ立ち老松を抱き居ふ
発く動きとゝかうかうひば放く逃人と云ふ阿三郎ハ足ハ飛〳〵く後ざるの
礙と蹴る踏ふ〳〵て苦と叫び歩ぶ純仏ハ班ち居板歯を脱〳〵鼻を吞ぬて弾こと
流る血ハ前蘇枋の樽濃く。簀子と染る異ふ〳〵と親子ハいよ〳〵大力こぢ
乱まく逃迯と居のこゝ〳〵ば阿三郎ハ猛虎を駈く群羊を逐ふ〳〵ごく頗ふ進ぐ
こゝ
小頓太をぢ〳〵ふまんと砂仆〳〵。刀ハ刀ハ図内ぶ眉間を刀尖ふく丁と砂る炎
所ふ〳〵ば乗時も冷ぬ拾ば尻居ハ撞と倒る我足下ハ楚と躍躍ふ驚ば劇居
こゝ〳〵
小珍二ハ刀と裏哩と敲蕩〳〵く。左手我伸〳〵撥倒ふ矢声をうけく投〳〵ば小珍二ハ
筋斗く柱ハ跌我ふ碑ふ腦液出く死てけり又彼切平決敗ハ大力ふ投〳〵ば。

一旦息ハ絶〳〵ども。辛〳〵ふ起死ふ。ふ〳〵ふ阿ハ痛ふ筋
縮ふて。逃べうもあらざるハ陽滅ふて〳〵ける阿三郎ハこのあの我尻目ふ
かけて踏居〳〵居。図内ふ些ハ動せ〳〵引捉居血刀ひく。その我ふ敵ば敵ふ奸賊
天四対ふひ〳〵ふ。よハ四郎ふ主ハ居ハ昊則民の父母ふ又ふの主ハ代ふ居ハ
政ハ四ハ民の為ふ妖母ふ。ハ賄賂我納ふ。非法を行ひ公道ふ藉く。
私欲我恣ハ。良民を虐げ。辛苦ふ我殺を何ぞ民の保母ふ居べ白刃我ハ
臨ふ今ハ〳〵猶遅ふ〳〵。冀ハ養ふ精霊ふ向ふ受く。三熱の苦我断ふ
散〳〵ふ弥陀仏〳〵と唱ふ。ふ刀ふ刃ふ。頭ふ光ふ石ふ。ふ我ふ我ハ純仏ハ戦慄
ふく。綱を敗〳〵ふて居蜘蛛のふく。ふ我張ふ尻を高ふ慌忙ふ逃ふ居我。
阿三郎ハ跳懸く項。ふ〳〵ふ撲地ふ引ふ賊尾ふ〳〵ふ死をおそ居ふ。縛の
起ふ沒ハ逃ふ居ふく脱ハ。善報ふ悪ハ〳〵ば善報ふ悪ハ〳〵ば

阿二郎

報あつて人民殺せば又殺さる。輪廻応報のことわりは汝が常に聞くところかくのごとくなるべしと罵り雄く引起せば池仏は目も口も血を塗る手を合し頂を縮め才を戰慄して大牙詳しくなべ言はるべしといふ声と共に頭は落ちけりそが隙に稍四跋く逃る切平決死を遣りとりさぶ等と呼ぶ阿三郎が一声に二人は耳我串をて青茲に塩を被せられぬ且く動かるぬ且く弦を擡げ。再び逃んとせしに阿三郎は霹靂の落るごとく飛掛て木偶るごと我引掴るごく浪ざるに投えしく國内が死骸の屋と予え推さえ中を切平汝は主の悪を資て民の脂を絞りしその刃の罪我顧ぶ仏を貴て俗を惑せし母の隠慝はさるわれるつるぐとさく私情を挾み事もるに及ぶ我れ獄舎に竟る獄舎にしてるひいる報ひいに速るべや父の苦痛を今まさに免れんと教圍あるべき刀を内にとりまはしく右の腕をうち落し汝且く苦痛を忍びくこらせんかう我

れよといふ言葉と磯と蹴倒せば鮮血滴と滴り来酒の樽の吸口をうち拂ふに異ならず共に刃の下に伏せ決死の魂死び離るごとく死せ屠が如く齒の根をあらぶ戰く声高かく神仏を只願祈念をさるに阿三郎冷笑ひ神明仏陀は善悪無しく極悪の人我清らぎこの期に及て何我う祈る汝は主の密謀を兼て平群萍平とい假號しく己ぶ我陪まて己が悪吉我誇貞ホロ我ホ我竊ぬの人ぶ汝奴ぬあぶ主の黄泉の倶我しく閻魔の廳を開せと罵る事言ふく頭くを振し又小珍二ホが頭を刎く我人を引きなち國内純仏ろ共に五つの首級我ぶとらくよ。

「ちくしのうちをとらつそのぎかまれどもあれはたをのるのあ
酷吏啖民其暴甚於豺狼然尚逃刑書賊尼
寂俗其妖類乎孤狸而弥見尊信父因茲枉
殂母依此凋落。雖然懲斷腸無由告訴官遠

而民情不通缺望蹉跎耳。豈忽祟讐哉。憤然磨刀。報怨雪恥。侯罪於寒郷之外。官使不璞問誰。六頭當開口咎淺江阿三郎。

と書ておくりあげる刀をとりて。切平次を一招引いろに賊僕且殺しさりや。さらば暇をとらせんといひつゝ。躯を鉄髻を摑て引揚よせて頭を切落し。亮とも棚にあけおくへそへて。夾衣の袖を折て一刀の鮮血を推拭ひて。急ぎ刀を鞘に納め。燭を吹消して忽地暗く。庵室の方に鶏鳴く声や暁に近づきにければ。母屋へ退く。偏にそれと便室の奴婢らさへ。文注所の辺にありて。龕堀が點ある。ここは大遠くなりしに阿三郎は心のまゝに親の仇人を殺して縁類を屠りと。飛ぶが如く庭門より走去らんとするに。用心の為に初め入る角門の篇鎖を断離て。門扇推開出んとするに。門卒既に先光岸破と起て六尺あまりの樫の棒を挟み

癖者等と罵りけるに。外面へ出んとしける阿三郎は追蒐来る門卒を打倒さんと闘ひしに。棒を以て大地を撲せ又振あぐれば。衝よせて棒を奪ひて向脛を拂へば。奴隷は躯を逆さまに門のほとりの大溷へ泥水飛して水と墮ある疼痛に叫びけれど。阿三郎はうち笑ひて棒を溷へ投棄て。甲夜に祈りし不動堂のほとりまで。かくり来て堂内に進み入り。明王をふし拝み。輙く仇を殺させたまひし威神力を謝しまゐらせ。久しき丹精祈請の効もなく。某かし時を得ずば國の為に。ならぬ人の一切盡して名を遂し一郎のねがひも叶ひて。遂にこの地を領ずべきなど。念ひの随に堂宇を修覆しまゐらせん。といひも又さらに。誓言にして躯を起し出んとする。其時の遅なる追蒐来つる轎夫兵四五人。不動堂の左右に伏て張ひを置阿三郎が出る所を。突かけて雄たけびし。是と組むを組せず。ひらりと身をかはして飛退りて躯を沈して撞

解死抗戈奉よ双方弁一尺ヨ隨ふ落ちの如く一人ハ石の浄ヨ盤一人ハ樟の代表
投つけられく骨碎け叫びも未だ死ざけアさらと見ゆ
隙なき勢を敵ヨ阿三郎が引抜く刀ハ明王の神威ヨいやまし俱利迦羅ヨ
兵ヨ縛の素朽く両人矢庭ヨ砍倒さ殘るひとりハ源蔵と負く外ハとて
前面ヨ立ち菜ヨ紙送ヨ著覆ひけく火り来ル一二ハ走り照らと焦火抜く佶と
ヒく阿三郎欲とるるヒハ一三阿爺欲怪我ちのふるさとと焦火を
ロ水衛く衣の裾ヨ折ル投ヨ迷ひ入アく潜ヨ脱ヒとル敷兵をそぶ怪楚と
騎ヨ乗て毋れのうハいヒ易ヨこヨてのる紙金ばさふとく迷ヨ[illegible]
奔ヨく。といそぐせバ天ハ生憎ハ明烏反哺の孝ハ毋のる夕想像々阿三郎ハこの
恩人ヨ一言の礼謝も暇ヨハ道ヨぶ往方ヨそふちら子の瀆の津ヨさて走去ら。
ヨ後ハ阿三郎ハ去ヨと数十町豫く水行ヨ[illegible]て件の浦辺ハまヨ[illegible]。

辰の比ハ[illegible]ヨ尺の間ヨ[illegible]ヨ追ふものる[illegible]
ハ漁人ハ朝霧の晴る[illegible]を[illegible]
ヨく往ヨ[illegible]ハ磯馴松ヨ[illegible]ヨ漁舟ハ[illegible]夜明ヨ[illegible]
舟の中ハ割鮑ハ[illegible]の内ヨハ雑魚も臣曲突ヨ折焼く柴ハ[illegible]
湯ヨ沸ヨく漁ヨハ四下ヨをらヨ阿三郎ハこれ弁ひと遽く纜引解く舟ヨ
内ヨと[illegible]を操ヨ乗出く。朝霧晴ヨ順風ヨ延帆揚ヨく走ヨ。この
時いく餓ヨ[illegible]件の割鮑を投ヨく[illegible]ヨ尺此の飯ハ[illegible]
餓ハ充ヨ管楫ハ取ヨ隨ヨ舟ハ細小ヨ[illegible]ヨ追風ヨ[illegible]
その[illegible]暮ハ下漁ヨ行徳の浦ヨ[illegible]ヨ舟ヨ乗ヨ。その[illegible]
屋ハ宿ヨ投め寝ヨ[illegible]ヨ来ヨ[illegible]
仇人ヨ[illegible]ヨ三郷の眼代ヨ[illegible]ヨ主従六人ヨ[illegible]ヨく走ヨ。

こゞ後難ハどまれくまれ。こゝろこゝろハ田のゝ人なり。後く往方を定めゞこゝ
別れゝけまゞ何如ゝ立在。何國ゝ候ゝ再會せん。さゝろ苦ゝ死ひとつゝ又彼恩
人一三阿爺勢ゝ引連れ延さんとゝく。圖内ゝ戰兵式桂ゝ人連係せゝ居ゝ
あゝん。心苦ゝ死ゝ。加以健田六人ゝ年來疎潤の罪式も勸解ゝ況や家の
艱ゝ。迹濁を大儲の汀の雁の廻ゝも絶ゝく別ゝ式告さゝり死ゝ苦ゝ死ゝ
ちん。ゝゝあれども古の賢ゝ人の言の系ゝ大信ハ信ゝ又大切ハ細禮を
くりゝゝとゝあり。ゝ命あり時あゝく表式ゝゝん十鈞とゝく
一毫ゝ報んともいと易かり。大丈夫ゝるゝゝ女ゝく表式ゝゝんやと表式激ゝて
さゝく結朝行德の宿を出ゝこの日より。萬里の客とゝゝれども路費ゝく
ゝゝくもゝ京鎌倉ハ得ありて方を立ゝ不便ゝり。泰衡既ゝ亡びゝゝども。
ゝ陸奥のゝゝゝ威德ゝ式武士ハあれ。ゝゝゝゝん。とゝひ決めゝく武蔵下

絶の封疆ゝゝ隅田河の上りゝ出ゝけゝ當下又ゝゝ曩ゝ母の名代ゝ淺草
寺ゝ詣ゝ觀世音ゝ式ゝ世ゝ。その中遊ゝ式ゝ死ゝ放ゝ式ゝども親の枉死をゝゝ
ゝひ。夢中の示現ハ今さゝゝ霊驗ゝ。ゝとゝゝべゝゝゝ立ゝゝゝく又母のゝ死ゝ祈
ゝゝやゝと河岸ゝ。ゝ觀音堂ゝ急ぎ詣ゝ。ゝ日早々ゝゝ千束のゝゝゝゝ
夜ゝ明ゝ急ぎ旅も夏の日ゝ長ゝ長ゝ次の日ハ十二四里の路式ゝゝて許
我の郷まゝ出ゝ。ゝ式日ハ暮ゝんとゝく天結陰ゝ立の雨さと降そゝぐゝ
論の崎ゝハゝゝ松ゝ笠ゝ立ゝ。ゝ式ゝ濡ゝ直ゝゝ社ゝゝ橋ゝ
白屋ゝゝけり。雅枝ゝ雜色ゝゝく。ゝ折戸ゝ鳴子を附ゝ。ゝゝ慰ゝ
ゝゝのゝゝゝく呼門ゝゝ戸を推開ゝゝゝゝく音ゝゝゝ奥のゝゝ人
ありゝく。ゝゝゝゝ維ゝ関ゝ河三郎ゝ緣ゝ隻子をかけゝく慇懃ゝゝゝ
奥のゝゝゝゝ熟ゝ後ゝ袴ゝ襲もゝゝ。ゝゝ追ゝゝゝゝゝゝゝゝ

入りて驚き怪び死要時簷下を貸るべしと云ふよあるべし朗戒起しさそそ不便の
るあるべん夜深じ物ざや。ふるの人入りて、憩ひ多人とのひて障子を引あけて
迭り面戒うちあハ一阿三郎あハあらざる孩健田の大人欲とくしふ。かひひ
かけぞとだのるふるの疑ひい釋ざるまけり。

初輯第十

旅宿るのぐら乃元服
十、石山社遺弓

御親健田秀作ハ阿三郎を勧めて草鞋を脱せ母屋ゑ誘引ひ夾衣
とるを生て濡ハる衣と更さと虎親切もうるハ阿三郎ハ憑ー。熱ー
さる疲労をあがえぞ思ひ仮けるく差るの元再會と祝ーハ曩ゑ某満禄きを
辞ー去くとの生活ゑ暇るの元のをならば。身の賤ー元ゑ且義くふく芸熟戒
嗜虎ハ親ゑ者ハ親ゑ者せ思ひるるる稽古の会戒ー。ちるハさ虎ゆを

あら孩ゑ。年来疎遠な虎戒のく。師ハるる満禄ゑ差るく。とるる思ひるハ。
るの虎故ゑ彼地を去くハの比ゑとの処ゑ移住ハるるやとるるぐくひとゑ
秀作うち烏帽子ゑ。ゑ戒絶く和歌ゑ告ざるべハと不審ゑ
ちるべー。先君ゑ厚恩ゑ費ー。殉死の後ハ後て二君ゑ仕じと思ひしゑ戒ゆりるく。
故朋輩の吹挙ゑよるゑ朝光の殿ー結城七郎使者を遣ーく招ること再度も
ゑ度く辞ーとゑとも主後の義を結ーく強て節義を折くゑあらざ師の礼を
く扶持せんとハるくゑ推辞ぐくて満禄の里人ゑ別戒告件の使者ゑ伴きて
結城の館ゑ赴死ハ去歳の春弥生の下旬ゑ。ゑ虎ゑ吾倚道中ゑのるハいざく聊
気を病るぐくひく。結城まで辿るゑ差ざ。ゑゑ宿るるその夜ゑるゑ命危く覚
ゑ。ゑ熟ゑ彼処ゑ赴死駿馬の骨と賣んより。ゆくぐ死ん。と思ひ決めて。そが
ゆく旅館ゑ留るく。ゆくび辞ーく使者を返ー。臨終戒結のこちるるけるべ。

朝光ハしもさるものにてかくとくれて限なく招き
あへず薬料など賜ひけれバ。然れども医
療を加るに命数いまだ尽ざりけん。軈て
春を迎三伏の夏果る比ハもとの如く歩
行自由になりぬ。しかれども官途ハ望まず
ねに結城へ赴くべうも。ゆるされがたく
満禄人に別を告て出たるの安房へ
還るも面ぶせに。只いかにもして里を死
どころにせばやと思ひ。この古家を購て
膝を容るばかりのすまゐとなしたれば。月
日を送るの便とも身一ツの易くもなや春月に

なりけり。和殿ハ又何ゆゑにいとも
遥に陸奥へ今忙しく赴くやらんと問ひしに
眉根うちよせれバ阿三郎ハ此由隠さず。
是豊六ハ宅住ヶ墓なく命を隕せし事
母とともに上総のうへ落しくて。兄ハ此讐を報ん
とて仇人の宅地に潜び入り。觀壠親子主
従ともに塵にしてよりも其妻細に告
るに秀作も亦ふかく嘆賞して。そのちから
和殿を相て賊を殺めし人と思ふなる。
勇悍あるはなれバなり。三吉の殺さんも誠
しかして果しからの大義を就せりと云の

仇を報ぜんと賞をとべ元つのみぐらのりその邪正を質ばかあらぶべ非ずの頂戴強く
おぼえぬで
吏ホ只あ〜ざるホ判断しく和殿が性方を審ねるん且く隠ぞこ〜住居を定めあ〜
と真成ま渝〜くぞて舎藏ろるとめくくちや十日あまま孫毋後ホ有一日使田秀佐ハ
阿三郎ホ對ひてつ申す。世を潜ぶゆハ貌を変名弐更るホちはエとろこ〜ことでも和殿を
十七歳額髪ハいと似げるゆ〜けるハ黄道吉日なるホ和殿の為ま元服の祝壽をとべ元ん。
和殿復讐の為仇ハるれ眼前ゑ〜ゑホあゆ拙ど勇敢藝術両ろゆら上達さるホあゆ
ざるせべ主後六人の勍敵を瞬息の間ま撃果さんや。加以十日あまり。ちつま同居
の動静ニ為村羮ホ成長ハ微賤の子ゆい肖ざるけり。和殿ハ實ホ豊ハが一子ろとべ。
泥ホ生く濁ま染ぬ蓮の花沙石の中ハ出ぬ。ゆくハ愛ま元少年を武人ハ子ま
せざりハ造物者の辟る狡ちのが僻目狡いるホでや。どうち或ま〜く問ひ〜ゆが阿ま
郎ハ秀作がさとくも人ハ識るとの大ろ〜ろのぶぬま感佩しく忽地ホちゆ申す。師ハ為

親のこゝろといゆり況やとろゆ信をあく吾を愛さるこの翁ホ何哀をろ隠ま元明く地ま
告ぐや。と腹裏ホ尋思〜く。ちとろ扇を笏ホ把ま師ハ寝ま藏量卓〜其ホ親
あまくさまとま名告るも面ろ元ろのなゆ〜ろ問ゆまエこの後ろさろのまく匿果ん罪ろ
ゆま。実ハ後四位伊豫守。旭将軍義仲ん。実毋ハ中三権亟兼遠ゆ愛女世ホ
ろ為勇婦朝絵ん。某毋の胎内ゆあまつるとろ元ハ神ろく和田義盛ゆ子と
生ぬ。三才ホ為まゆく母ゆろ共鎌倉ホひ〜ゆ。箇様ろこのゆゆろて母親
朝絵ハ刃ホ伏〜。某ハ乳母なる某ゆホ抱ま〜く。そゆ舊里へ伴ま乳母夫婦を親ま
ろく村落ま生育ハ実の親も又別ま養父あまとハ絶く〜ろゆ〜ゆ。
ざ為初ま師ハいちまく相〜ゆ。由緒ありぬべくゆまとて問ホ尋ま二遍ま
及べり聰察睿悟いくぞくの人ま為ハ識量なく人言豈ろゆホ及んや感ぜ為ホ
ろの為ホあまるまあり。ゆまそハ世度の厄難ま為ハ後難をとるまゆ親子ろまく

海陸の平定えらんと願さるる乳母菜さぶ真成ふ実母の遺言ニ云と告ゝ素姓を
現示ゝ過去現在の親の記念この二種を遮ゆせゝべ慚愧後悔術なくふ
憤激ゝく立地よ。去就改めつ。義をつくゝ勇べたぶ安まゝん養父の仇入成新ん
義ふ決るのうらさつをけるく母を行させこの夜眼代結
堀ホ怨あるの武殺ゝく嬰裸ものを養ふ月せゝ邑親のるよ恥成雪めく志を致ー
たつをとくく疑念武釋ふくといしつ躯く懐よを旗絹をとを出ー倶利迦羅の
太刀ろ共よなゝべ置ゝつ入せゝるべ秀作類よ嗟嘆ゝく席武更め礼儀正ゝく良
将勇士八亂ふゝと世ふハいゝども考ふ八あゝど槌檀ハ二まゝより芳ゝ紀と裏木ふ
秀鳥鳳ハ卵の中よりそその声緒ふるふまゝとまを見ふのすゝめつのを田舎児よ
似ゝるくつをふ和殿武年来研を一疑念ハ古ふよ氷解せを木曽殿ハ清和皇
別古今独歩の良将ハ惜ふる終を武よくせど功ふ誇をく君臣の義を存を狼藉

際限ふのふ陸ふ高ふ武ふ古ふのひ死ふ力を武今その子孫ふと京鎌倉ハ出ふ
伐踵を旋さべつふと嘗ハ冠者義高義仲の嫡男ふの如ふ鎌倉殿の聟ふなを
曽殿亡びふふの後い孤ふなく武義ふ高入向川ふく新を一とを さりとても私の
敵武ふく孤ハ挟ゝく理非をもこりまど時運武ふらべものゝ勇悍血気ふ乗ゝて
治まる世武乱さんとやふふハ四時ハんゝ武ハ武士とも勇者ともいふをこの頃ハ武
分別せゝをとを木曽ふ為亂とのひ絞さべ禍の道武みべゝ利くゝ好慎を
ふへゝふ彼春兵武盛ハ桓武の皇別坂東の八平氏の隨一ふを祖ハ入三浦ふ義
明鎌倉殿のおんみをを差命を擲ちこ感世ゝくく人のあるところその忠信ハ兼嗣ハ
子もふ孫も貳ふろ有ふく鎌倉殿を仕まる軍功も亦莫大ふを武盛ハ
ろろ左衛門尉を補せゝをとく侍所の別當ふを武親ゝくくをべゝ綾を
君ゝく不義ふくを今ゝをかくくあをぬとも時を待べ推ふゝく武盛ハ再

曾我兄弟と名乗うちの人と叮嚀に諭さるなり阿三郎うち笑ひ。いとまを乞ひ感謝し
姫ぎ。実の母が遺言もこのてのみ心一筋実父のうえ八一生涯口外まべうもいとひど三年の
疎遠就中おんぢ後難をも憚らず愛あるまとの世をおんろ尚師ゆえ何でか隠さべき。
と思ひ切りかなど恥ぢの紀物かくるも就つるまゆつるまぬ今ぞ思ひ切ぬ誓言。外へも
洩しいかどといふ秀俊ちと点ぢ微ぬくまろるるひあけり。朝絵の君へさらゆも
いろまど曲豆六夫婦が心操世の田夫山妻ゆえ又有かくれとちの俗べ。さこの要ろ紀
可答ぬ思ろど時就根ーたまれ元服ゆえ式あるまて加冠理髪の人を擇ま唐
山ゆえこの日ろると字さといふことあり。こぶ圓ゆも亦名を定む和殿ハ之ちゆ志ろ
かるるく世就志のぶ為ろ且べ只速丈夫ろるまく足ちん小盟ろ湯を汲てよ。
いで剃ぬ紀進せんといひく躯く立あがるまく棚の隅ろるま砥を取おろ剃刀を
合せろどきれば阿三郎ハ坐を占て額髪就搔出ー推濡しくまろ俗ゆ秀俊ハ後ろ

立く。志ぶかこと就剃ぬ紀髪結果く。武就拭ひ前ゆついるく。こん吹りろ遇夫ゆ
うるまけろ愛さしくと祝さるべ阿三郎ハ盟の傍ろ人類さー必てうーうんて茶
志く思就謝ー既ろ形就改されどもいまぐ名就更ゆまど所ろ名告いんと問べ秀作
洗吟ー実父の木曾ハ憚ゆ。和田ろりく苗字とせん欲三浦をりて苗字とせん欲
みぶうち種ミ思ひ絡といろまく雲時就傾け乗ーれー身の勘乳ゆるる次親乃
苗字を賜んと嗚呼ろる恋るよりろどや。安房ゆく人ろるまろべゆて郡の名と
取く朝夷を苗字とせん欲某彼処を志ることれ縄くけの不動ゆ祈念しくり
一郡の主ともるべこまうしく。この地と領せん。さるこ況ハ思ひの隠ろ堂字を
修西復ー苛らんと誓ひーるゆ必べ此彼ゆくく朝夷と唱ゆるーくゆ志ゆ今
愚意就ゆく定んろ実父ハ義仲養父ハ義盛共ろ諱ゆ呉の字あるまゆるべ
竊ろ一字ん義くく朝夷三郎義秀と名告ゆべるとゆ秀俊ゆメくうちを笑ま

その一段ちゝろべし秀の字は味ひあるに才秀ざれば力を立ぬよりうく運秀ざれば
遂ひに又其人勇の就る所言も其所あらざれば後のと古文も義所あらざれば
其秀れば名も又秀ぐ名秀れば人服をこと其豪傑勇士といふこと所況れば
其秀の二字究めく愛さし又朝夷は朝野よりお臣上は朝廷下は草野異域夷狄の
と名ゆこもその名称揚る祥とやいろん賀とべし。なるとべしと稱ふ阿三郎なる人を
師の賞美甚過さると秀の字は師の字を兼ねのこゝとに只顔は謙遜しく
さこの日よりと朝夷義秀と名告ると。ひくく又秀徳は安房上総より日毎に
乾魚賣所来る商旅は大磯のる武河は鎌倉へ伊豆へ則領主伊豆五
郎満禄信俊又ぶく彼地は下向しく荘司村長里人ホを召集合顔末を尚郎
正を質し理非を判断ある所ホ鎌堀ホが年来の奸曲をべく露顕せること
よりく豊六ぶ妻はさゝなる阿三郎武追捕の沙汰は渠その義武守へ訴ど

私ホ意趣と演く眼代を殺る外は民数帳の名簿を削とり立くらば推とも
置く速はおうせとて村長ホ為ろ武ゆさ。縛ゆ異はおさゆりぬとの精細は
物ぐさ秀徳窮は敗びく賦く件の趣を義秀ホ告ゆるせ是よりもて世武憚ら
人ゆ逢せるどとれども田舎は言葉ホ敵は明ても暮ても師弟両人あるとは兵書を
講ぐく古人の得失を討論し又あるとは太刀を合せ的を射るぶるホ月日を送る
程ゆ年暮で春ゆ来ぬ紅梅ゆるホ衣更装の上流はるゆるふけり。ゆらと病ホ秀徳
御言再発しく病苦ホ為ゆ危くて良医さ
其ゆ薬餌をとゆ看病を尽るゆ武秀は是ひて良医さ
世ホ類ゆまくゆひろん有一日ゆ中ちゆる頭顱を揺く義秀ホいへ
こが上総はあるとは又安房は在り」日ゆ弟子は会ふとは皮武伯と骨を
ゆるどは及骨を伯べゆは和殿只一人ゆれども今は総の許我ゆく臨終水武

取せんとおつやく[illegible]ひかけざるを死過世あ母死恩義ゑ愚老い今茲六十八歳妻い
先ゝ[illegible]子ゆゑ[illegible]惜けくもあらぬ齢ゆゑ[illegible]世ゑ貪るべ死ゆゑ死るべ
和殿又この地ゆゑ[illegible]笛ゆべゑ下野国足利な庵学校の学ゑ[illegible]長老い安
達盛長ぬしの子ゆゑ[illegible]治業の年間古主ゆ後ひ藤倉へ[illegible]死一面の
識あ至今ゆ至く年ゆ[illegible]絶く音問せざ[illegible]ども彼長老い儒仏の碩学その性
温順ゆ[illegible]く容を愛せり。和殿武藝ハ熟さとゆ[illegible]ども文道ハゆ足ざ庵欲且く
彼ゑ身を寓く学ひそ禄を[illegible]ゆ彼足利ゆる学校ハ参議小野皇朝臣
[illegible]建庵とゆ皇ハ永見の孫岑守の子な至弘仁十三年文章
生さ至天長元年巡察使弾正さり。頻ゑ進く参議ゑ叙せ。当時の博物宏才ゆり。
世ゆ[illegible]文殊の化身とゆ皇巡察使さ[illegible]ゑ奏ゑ清く州毎ゆ学校を造営し。
孔氏并ゆ十哲の像を置く春秋ゑ[illegible]祀て緒生を[illegible]ゑ学ぶ世ゑ[illegible]て

学校廃ゑ下野ゆ[illegible]庵ゆ[illegible]。明堂を守るの儒生いと多くゆ至ゑ法師を
入て[illegible]兼学さ世則ち[illegible]紙守ゑ[illegible]ゑ近ゆ足利義兼ぬし。堂社を再興ゆ[illegible]
明堂昔ゆ立ゑり繁昌を庵より他ゑ他ゆ至今和殿の才をゆく猶亦彼ゑゆ勤
学せゆ文武両ゆ成就しく遂ゑ志願を遂んと絶く疑ひゆ[illegible]
とも。今の世の人ゆ笑の中ゆ身を隠せゆ身の慎ゑ肝要な至時運ゑ縛ひ
撰ゆあく重用せ庵とあ至ども君の寵もゆ[illegible]ゑ績を挙庵
べゆゆ功成名遂ゆく退ゆ後ゑ必悔ゆ至辟言べゆゆ古主ゆ[illegible]の兇藤
倉創業の功臣ゆ至ども殉者ゆ[illegible]ゑ弾ゑく忽地[illegible]
殿黄[illegible]亡ひ氏上総国一宮の神主兼重ゆ藤倉殿へ[illegible]く云故殿廣常
生の時宿願の旨あ至く納ゑ[illegible]甲一領今ゆ[illegible]宝殿ゑこれ有ゆ下命。
所ゆ頼朝卿ゆ[illegible]ひて藤刑宮代外通と一品坊と遣く件の甲を[illegible]

御覧じ給へ高紙に結付け給へ一封の書状あり披き給へ商ひ給へ鎌倉殿のお人さまに成
運紙祈る願書へ祈願の趣真成は三ケ條成書載て治承六年七月日上総權介平朝
臣廣常と自筆をりく字せしぶうち驚せのひろ原来廣常は迷ふのうまれ悔し
くも疑ひく深せしとよと愧らひのひろく夜殿の陰に天羽庄司直胤ぬし相馬九郎
常清ぬしの縁坐よりまく囚人となる給へ紙召出しく厚免せ給へ紙即
座に仰下さるとは思はざる一壽永三年正月十七日のうちなんこの後建久四年の
秋蒲殿縊頼朝死を賜しとも迫後悔あるとと秋世の孤疑の人をあまうと醫師が
病症を診損じく人を殺さるを嘲し名將さるひくの如し暗君庸主さるあらん
功名の下世に久しく居べらびとぞ大夫文種を練らる范蠡が辭たるとぞや
生涯さる懸念しく終り紙慎さのひねと叮嚀な教訓し病若を忍びく均長老へ
紹介の書状を写めとは紙朝夷に遠与せしく義秀に感謝な悔さと遠く扶けさく

真成に普病をのくく又五六日を経過ぬ秀忠に深く哀さく殺なむしくるのはしえび
義秀は哀悼して親を喪へ心地とされど許我より程も遠くらぬ真中の野寺
初七日果て次の日に
秀作ぶ衣裳へさらるるを家紙さへ售くらぐく香華の料に寺へ布施しとぞ紙
半歳も貯へを里人に別れ紙告つく足利紙授く紀行せるを時は弥生のすゑ
山は翠に色くの花綻びく霞ふく水は皆してさるくの鳥囀るとく風暖く行人も
馬上に聽つる農夫は畝に憩ひ家に種を浸し門に果紙摘む人のさるの長閑くく旅
のうるの死ぬるとも親のうるとぶ往方をひるとこの楽くもあらぶ歌ふ詩も賦も
名所古蹟に心とまるで日に歩まを夜に宿るを辛きと野なる足利に至るまで紙
勢死ぬく均長老を尋ぬに彼長老は迂化して今は二年ぶるの居とのふ義秀は又さるに
まみる紙失ひくいふせはとぞひるびるるに安田に尋ぬ笛に諸生に答く

只今の学問は真言密宗の碩学なる理真上人なくしてまた筠長老の
親族に鎌倉にてそなたと申す。おのれさぶ人もあり。なほ細く紙書くんと
なるべく字吉見といふ地方に対者義邦といふ郷士あるとは長老の才子なり。
書縁あるよりなほそなり。其紙よりの伊勢に向ねじ書く紙書くと書くべく道乃
を行くべし此と叮嚀に示せしべく義秀はそのへ歩行より紙述く吉見の
くへ赴くべ。なほそなつくくそのやり。筠長老そなそなそぶ由縁の人といふ
も先師の紹介経なる似なり。さなどとしく今夜に投くいかん知をなし。
且紙に被郷士を誘ひやとそなくしべ件の緒生が海に隨に義邦の宿所を書て
外面なる瞻仰なる衡門紙真中ゆきそなく左右へ竹邑締繞しなる一構乃宅
地なるに進き入くなるに垣の内に穀蔵あり。柴小屋あり。奥ゆき書院と
あべ紙客居と紙茅葺なるべく造りさる田舎めでいと愛し給く

なる門ば小厠なくの雑と沙ば美秀云云のよう紙告げなる小厠ばふ主人の文なり
誘引と今朝未明なる大石山へ翔る弦射なる紙暮まば選べもあるべ。
り對面せんとなるば翌又来ゆへとの義秀ゆく。原来幸なるに又来るなるとの人
けく外面へ退紙ん門辺に立く空うち御紙日ハなる卓なる翌と契りて外に
宿を求んなるに西彼紙小拵せべ義邦にあくるあらん。さらとく道紙人に
問へ大石山へ赴くく。麓の小舎に火縄を購めおばつくなくもこけ入舎に二人当
囲の高峯なり羊腸なる山又山樵夫炭焼ホが通ふ路。いく険にあるに迷これく。
何紙さくく彼人にあべくとなるなるとなる。なるに勉く登なるに行ふいと坦なる処に
来つ。この四辺芙生めくく。左に小岡あり。岡の辺に焼捨ててなる
灰あるにて傍の松に滋藤の弓を倚けその下に猟矢一條ありけるを取揚て
こは紙なるに謀くく刀野時夏と字くたるとこは必彼輩が遺さなるにのめど

大石山
義秀
射る
刃野太郎村夏

朝比奈の三郎

あらん焼捨てんと思ひ給へ。さてこの弓箭紙りく推量仕り相去候ことをうけ。
初對面の牽出物とて又弓紙射て心の憂慰んと申とるとこちらの弓箭
を挾み梢を向上て俳徊せ給へ。又吉見對者義邦は年来後こんせられる。
筠長老なくるとても文武の学問懈らざとてとりく学校へいまだ繼續持況
なのどと思ひまどもの刀野太郎時夏と勝式まづ抱いりてとちかくなりもれ
ど。渠ら亡又照時と母君幡太の方は新れ申と成と笑るひ申とがうち解
と思ふ気色はなくて遠離んとのみ思ひのうち。生憎は時夏と桃吉の日を
共ゐせ給へ困ん果ていつとなく学校へ勢死ゐまど廣光と式弘て。その懈を
遣ん長邦は瘴の類。此ことを告ゐ廣光又こと式練めく刀野は浮浪人なれだ
執権時政ぬ所縁あと。さ思ひ當國の守義兼ぬも等閑ゐ。これと
扶持く客分と稱ら思。ちるは君がちろは忌く。いんも強面もて思ゐ彼人
心恨を含んこは禍胎。雙はその子は及さんといふ本丈あるはひまどこ
交ゐ人とをとく。渝しまう世しは義邦は有理とも。しく又学校と交加つ。
時夏は會毎ゐさりけなくひてるしゐは早晩友垣結ゐてこの日大石山のふも持は
誘ひ出さとゐひは久ゐさは義邦はけの拔山式鬱悒忠ひゐどの暁くゐ路
なけれは後者ゐは宿の惟光な思。江三二は弓箭をりとく小斯は割箸を拉擔せ
未明ゐと出ゐひぬゐとしく時夏は懐刀行騰弓箭まで。いと華ゐる思寸
拗しく。媼子井平といふ若當は替弓さえりとせく。奴隷四五人列卒十人式前ゐ
立し後は後へ義邦と推並く伴の山ゐ赴式。彼首は立彼ゐ求備ゐ。さ世ゐ獲は
ちぐなくく日はとや斜ゐるとふけゐと時夏素ゐと賭を好めば豫て義邦は約ゐ
やうゐと和君は先さちくゐ式射て落さば布十疋式牽ゐ。ゐ和君り先
たちくゐ式射て落しゐく布十疋進ゐせん。このゐ違乱ゐとぐゐどと豫てゐ

定めがたき邦貪るさろろのくまとび立さるのまこまとろのろの此二も懸念去あろね尼。時
夏入いのふびひろくくこれハ射角と射る毎ゑ化箭のまゆくく物弦獲む却若堂廿
平ろ。山鳩二三隻射さるまーるば時夏おのもくく焦燥くこの箭ハ己ろ己ろ己ろーと
科弦弓箭ハ頁せつろろと替組弦おろくく。彼此とたろく徘徊せつゑ浩然ハ野雞
一隻列率ゑ追ゑてく叢よろゑたろくくと立ーるば。まろや。と矢ろこ搔繰ぶ時夏弦
邦推並くくよつ引固て彈ど射る。ろうゑどゑ邦ハ己ゑ己ろ己と射て中ろば時
夏義て必恨ん攘だろ。とおばせーるば寛を外ばゑひゑけゑ。そのおひもろく時夏が
射る箭ハのくく翦ゑくゑるゑハ間差ろゑまーハ野雞ハたちまち地ゑ落たゑ裏
皆中と誉散動たくく落屑と却ぐく件の野雞を引捕くゑて来ゑば時夏ゑて遠
ろく。鳥ゑくくちく屑弦。とろんかろんて満面ゑ笑弦含ゑ吉見生ゑ己ゑ己ゑ賭ゑハ
某勝ゑ高ん。矢柄ゑこるば名弦紀ーくゑゑこるば紛ゑべうゑあるざゑけり。いゑとゑゑくと

袴貝ハ箭弦接とろんと。ゑ屑弦ハ前面ハ桝落ゑゑ声高く且くその箭を抜とゑゑ
ゑふゑる野雞のゆーハとゑふゑゑと禁ゑくく樹間を歩る人ゑゑゑ皆驚ゑ笑ゑ。
その人身長六尺ろゑゑ眼ハ清く眉秀弦骨逞ろゑて。手ゑゑ足ハ長く長類ハ寒
ゑて人品骨相賢ーゑゑ。拷の甲掛脚半ゑ両刀を腰ゑ帯ゑハ滋藤の弓ゑゑろ。
ゑこの人ハ見別人ゑゑゑ。朝夷三郎義秀ゑゑゑ畢竟義秀ゑゑゑいゑろ
ゑゑ物語ゑゑ。ゑこハ巻ゑ更條を改め第二輯の首ハゑろゑゑ抑義秀の伯初中ゑゑゑ
ゑその鳴めゑゑゑ至ゑゑ物ゑゑゑゑろ長ゑゑ。年弦積巻ゑゑゑ剖剛氏を
学ゑゑゑゑゑゑ全本ゑゑゑ。壁ハ最篇弓弦月又今茲著ゑゑハ犬
士傳の類ゑゑゑ敢清四方の看官ゑゑゑを結ぶの巻ゑゑ倦ゑ。ゑゑゑゑ毎ゑ嗣出
ゑ弦俟ゑゑ高評弦ゑゑ。

朝夷巡島記 全傳巻之五 終

吉田蔵

編述　曲亭馬琴稿本

浄書　荏土　千形仲道謄寫

出像　一柳斎豊廣畫

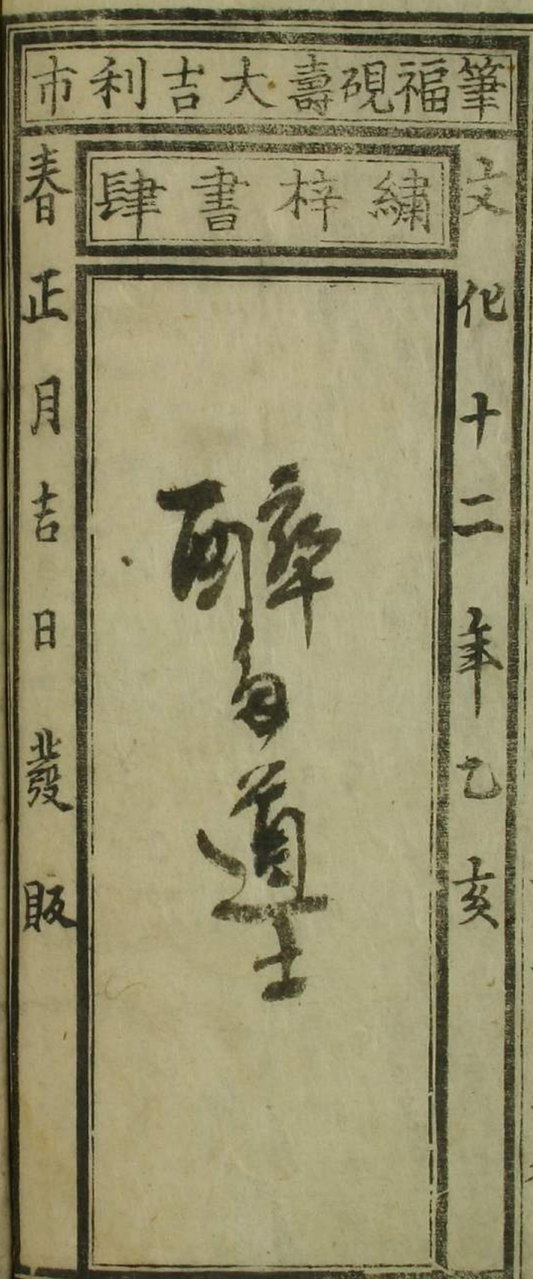
剞劂　華洛　井上治兵衛刀

筆福硯壽大吉利市

文化十二乙亥年

繡梓書肆

春正月吉日　發販



○曲亭新編繪入草紙物かさねと畧目　浪華　文金堂藏板

朝夷巡嶋記　豊廣画　初輯五巻刊行　この書ハ本房の新板鎌倉九代記鎌倉実記　第二輯五巻嗣出　鎌倉新紙ホまぐく朝夷の事迹ある歟元ら刊行ものこと事ハ俗者の新題向ふ出ずく聊もかつ変ずく新る編るものふなん　第三編近日嗣出

南総里見八犬傳　肇編五巻　二編三編引つゞき発出　柳川画　全五冊

月氷奇縁　丞入よミ本　全五冊

新累解脱物語　右ゑ同　北齋画　全五冊

昔語質屋庫　古書俗説のあまり紙正しく　いとをしく　臭ゝしき草紙　全五冊

松染情史秋七草　丞入よミ本　豊廣画　全五冊

燕石雑志　随筆ゆめ〻古書を引ゆるりを　正しくみつゝの考をのせす　全五冊

俳諧歳時記　云ふよりせの再注ハこの書ホ　とくまるもろ　并ニ神女湯きもの九つ紀虫の妙ホ私見せゆく　とゞ次ゆ山ハ江戸神田ゑび町柏屋ゑ売くふもあり　全二冊